

# ディフェンディングチャンピオンとして挑んだ全日本選手権

小林あかり

結果：優勝

天候：晴れ

距離：86km（12km x7周）

昨年、この大会で初めて全日本チャンピオンのタイトルを獲得し、今年はディフェンディングチャンピオンとして全日本選手権を迎えました。本来であれば、2月からヨーロッパでレースを重ね、帰国後は高地合宿を行い、万全の状態での大会に臨む予定でした。

しかし、その計画は大きく変わることになります。

ヨーロッパへ出発する前、がんで闘病していた父と抱き合い、「3か月後には帰国するからね」と約束を交わしました。その言葉が、父と直接交わした最後の会話となりました。

帰国して2日後、父は静かに息を引き取りました。

タイムトライアル全日本選手権の1週間前、ロードレース全日本選手権の約1か月前の出来事でした。

帰国後は父にバイクを整備してもらい、全日本2冠、そして連覇を達成し、一番近くで支えてくれた父と母にメダルを掛けることを目標にしていました。その夢は叶いませんでした。

それでも、一番心に残ったのは、私を支えてくださっているスポンサーの皆様やチームスタッフ、友人、そして多くの方々が、自分のことのように父の死を悲しんでくださったことでした。

その姿を見て、「自分に今できることは何だろう」と何度も考えました。

私にできることは、走ることでした。

勝つことで支えてくださる皆様へ感謝を伝えたい。そして、自分の走りで少しでも勇気や希望を届けたい。その思いだけを胸に、この1か月を過ごし、全日本選手権のスタートラインに立ちました。



レースは新潟県三国川ダム周辺を周回する1周12kmのコースで行われ、女子は7周・86kmで競われました。当日は朝8時スタートにもかかわらず蒸し暑く、暑さとの戦いでもある過酷なコンディションでした。



スタートラインに立ったとき、不思議と「ディフェンディングチャンピオンとして勝たなければ」というプレッシャーはありませんでした。胸にあったのは、「父に優勝を報告したい」「応援してくださる皆様へ結果で恩返しをしたい」という、その二つの思いだけでした。

1周目は集団の様子を冷静に観察しながらレースを進めました。そして最終局面の下り区間を走ったとき、このレースの勝負どころはここになると感じました。

2周目の登りでは自らペースを上げ、集団を絞ると同時に、誰が最後まで勝負できる選手なのかを見極めました。しかし、自分の得意な登りだからといって無理に勝負するのではなく、コース全体の特徴を考え、脚を使う場所を慎重に選択しました。

その後は下りでは自分のペースで先頭を引き、登りではライバルの動きを警戒しながら冷静にレースを組み立てました。残り3周では一度アタックを試みましたが決定打にはならず、「勝負は最後の1周」と心を決めます。



ところが残り1周で展開が変わりました。登りを得意とする木下選手が遅れ、内野選手との一騎打ちになりました。それまでのレース展開から、内野選手は平坦区間で非常にスピードがあることが分かっていました。仮に登りで抜け出しても追いつかれる可能性が高いと判断し、勝負は最後の下りに懸けることを決断しました。

最後の下りに入る瞬間、迷いなくアタックしました。内野選手も下りが非常に上手い選手でしたが、勝負できるのはここしかない。その一心で全力で踏み続けました。

下りを終えても差はわずか。残り500mの登りでは、ただゴールラインだけを見据えて踏み続けました。長く感じた最後の100mを越え、ゴールラインを通過した瞬間、真っ先に浮かんだのは「勝ったよ」と父へ報告できたという思いでした。



今回の優勝は、ヨーロッパで経験したレースから得た戦術眼や判断力、スピード感を日本のレースで発揮できたこと、そして苦しい時間を乗り越え、自分自身を信じ続けられたことが結びついた結果だと感じています。

この結果は決して一人でつかみ取ったものではありません。日頃から応援し支えてくださるスポンサーの皆様、チームスタッフ、家族、そして温かい声援を送ってくださる皆様のおかげで、最後まで前を向いて走り切ることができました。心より感謝申し上げます。

このチャンピオンジャージに恥じない選手であり続けるため、そして世界で戦い続けられる選手になるために、これからも挑戦を続け、競技力だけでなく人としても成長してまいります。今後とも変わらぬご支援、ご声援のほどよろしくお願いいたします。

